

## 昭和の東南海地震体験談

氏名：野口 哲夫(のぐち・てつお)  
生年月日：昭和12年7月28日  
地震を体験した場所：那智勝浦町  
当時の家族状況：父、母、姉



### 1) 地震発生時の状況

当時小学1年、勝浦小学校へ通っていた。その日は1, 2年生だけが昼前に下校していた。家の隣はなぎさやという旅館がありその前で近所の子3人で遊んでいる時、突然、大きな揺れを感じた。何が起きたか、分からずに「何だ！何だ！」と話をしていると、旅館のおじさんが慌しく外に飛び出し「お前らここへ蹲れ！」と言って、その場に蹲った。恐怖のあまり“怖い、怖い”と声に出し震えていた。

揺れが治まり自宅に向かった。すると家から母が跳びだし旅館を挟んだ隣の従兄弟の家に入って行った。自分は母の許には行かずおじさん達がしゃべっている所へ行き「大きかった！」等と地震の話をしていた。当時、造船所をやっていたおじさんが「おい野口お前、あの畑にある井戸に行って水あるか無いか見て来い」と言われ、井戸まで走った。覗き込むと水が無い、戻っておじさんに「水無いわ」と伝えると今度は「お前、浜に行って潮、引くかどうか見て来い」と言われ浜まで走った。うずくまって海を見ていると段々と潮が引き始め底が見えて来た。岸から3, 4m位引く所まで見てから戻り「おじさん潮が引いた」と伝えたら「津波が来るさか逃げろ！」と言われた。この時、初めて津波！と言う言葉を聞いた「喚け、近所へ」と言われ、「津波が来るから逃げろー」と喚いた。ただ無我夢中で一軒一軒喚き回った。恐さ半分で覚えていないが7軒位喚いた。

家に戻ると母は居た。母に「僕、先に逃げるね」と言って外に飛び出し走った。今の福助堂辺りで立ち止まり、周りを見渡すと駆向いて逃げる人と逆方向へ逃げる人がいた。その時、何故だか解らないが先祖の墓に向いて走った。

(↓写真 避難したお墓から見下ろす天満地区)

### 2) 津波襲来時の状況

既に足元まで波が来ていた。水しぶきをたてながら夢中で潮の中を走った。墓は小高い丘の上でありそこでは何人かが避難していた。中には経を唱える人もいた。自分のお墓に向かった。その先から「わあ〜」と喚き声がするので行ってみた。

そこからは朝日、天満、浜の宮辺りまで見渡せ



る。玉の湯の方から回り込むかのように浜ノ宮(現町立温泉病院)の方へと津波が押し寄せて来るのが見えた。あっという間に須崎がのみ込まれた。まるで、たらいにホース入れ水を流すと淵に水が廻る、そんな状態に見えた。

後日、聞いた話では2m程の波だったと話していた。

勝浦港側からの津波は溜まった水が溢れ出る感じであった。

当時、塩屋(桜道)辺りには二、三軒しか家は無く、その1軒がおじの家であった。避難した場所からおじの家が見え津波が押し寄せて来た！おじさんとお婆さんの家が「うわあーやられる」と思った瞬間、波がおじの家を追い被り柱が倒れ影も形も無かった。



(↑写真 避難したお墓から見る勝浦港)

津波は勢いを弱めなかった。桜道で自転車に乗って勝浦駅方面に向かって走っている人が津波に追われた。波は襲い掛かるかのようにすぐ後ろまで迫ってきた。その時、自転車を乗り捨て電柱にしがみついたが、その後は分からず・・・津波はそのまま勝浦港方面へ流れた。築地方向を見ると、人が屋根の上に乗ったまま流されていた。「助けてくれ、助けてくれ」と叫んでいた。

### 3) 家族の行動・被害

恐怖で、しばらくその場から動けずいると、隣家の二歳年上の子が探しに来てくれた「お母さんが小学校で待っている」と手をつなぎ連れて行ってくれた。母と姉と一緒に家に戻った。3人とも特に怪我もなく無事だったが母は腰回りまで潮に浸かっていた。夕方には浦神から線路沿いに歩いてきた父も無事戻り、帰り際、津波で線路に打ち上がったと浜魚を持ち帰っていた。それを焼いて食べた。おじの家族も皆無事でたった。今の国道近くの高い所に避難していたと聞く、その後、兄弟の家で避難したが大工であったおじはすぐに家を建て移った。

### 4) 集落・周囲の被害

家の床下は他の家より高く造っていたが津波で床上まで潮で浸かった。

築地では潮が腰まで来た。海拔2m位の所では90cm位まで潮が来た。津波は勝浦港から上がって来たのと那智天満からも押し寄せてきた。

那智から来た波は勢い強く、今の国道に沿いながら流れ勝浦駅、当時の貯木場辺りまで押し寄せて来た。近所で同級生が津波で亡くなってしまった。おばあちゃん、妹も亡くなり母親は新宮に出掛けおり留守であった。

後日、今の紀陽銀行(昔、入り江だった)の駐車場辺りから何体かの死体が上がり泥の中からは手が見えていた。勝浦での死者は37名。

## 5) 地震・津波後の生活

特に家の修復の必要性もなく、生活もさほど不自由はなかった。学校が何日後に再開したかは記憶が途切れていて覚えていない。食料・支援物資など無かった。当時、トイレは汲み取りであった為、津波で汚物が流れだし、芋が汚れた。だがその芋をよく洗って焼いて食べたのでそれ以上は困らなかった。そもそもその時代、食べ物は少なかったので気にはしていなかった。家は掃除し寝泊りができた。その夜、自宅近くに赤レンガ造りの工場の前で、焚き火で流れてきた芋を焼いて食べた。

## 6) 次の災害への備え

現在の自宅から避難所へ蛍光の矢印表示や勝浦御苑前から一の滝方向へ堤防を高くする提案がされており、堤防拡幅工事は年内中に着工する予定でいる。出来上がれば海拔5m以上になり全長500m近くある。北浜地区では災害時の避難場所は各、班ごとに別れている。逃げる時は声を掛け合い団体に避難する。又、災害意識を高める為、定期的に津波避難訓練を行い避難場所と逃げ道は自分達で草を刈ることにしている。年に3, 4回草刈を行っている。こうして繰り返し行うことでいざと言う時に迷わず逃げる事が出来る。草刈＝避難訓練。北浜地区では防災活動をし補助金などで転倒防止の電話や平成22年度は75歳の独居の方に無料で警報機を付けるなど積極的に行っているそれに発電機や北浜地区、世帯数の水袋も用意されている。区長さんはとても防災活動に熱心な方である。

## 7) その他

津波の体験から、何処へ出掛けてもまず避難経路等を確認する習慣が自然と身につけてしまった。地震体験から当時の避難状況を考えると地震＝津波が来るなど殆どの方が知らなかったのではと思う。友達の姉が津波で亡くなった。その子はお宮付近に繋いであった舟の上で遊んでいて津波で流されてしまった。もし誰もが、地震後に津波が来ることを知っていれば助かったのではと思う。私はこの話を聞いてから津波に興味をもち調べることにした。今後、防災活動や地域、子ども達に情報提供が出来ればと思う。